養鶏に力をそそぐ男たち
―新しき村―

宮崎県木城町と、毛呂山町との友情都市盟約を記念して、新しき村に暮らす人びとを特集する最終回。今回は、養鶏を担当している3人の男性、河内光延(67)さん、本間健史(64)さん、佐藤直人(43)さんを代表して、本間健史さんに話しをうかがった。

本間さんは、京都市出身で、家は仕立屋を営んでいたため、中学を卒業するとすぐに大阪の呉服屋に住み込みで働きに出た。絵を描くことが好きだったが、毎日、就寝は午前2時ごろで、休日も仕事を頼まれるなど自由時間のない日々を送っていた。そんな折、友人から武者小路実篤の本を紹介され、新しき村の存在を知った。新しき村では、労働の義務はあるものの芸術活動などに充てられる時間があると知り、19歳の春に入村したと笑顔でいきいきと話してくれた。

新しき村では、ボリスブラウンという茶色の卵を産む鶏を約9千羽ほど飼育している。飼料は、高品質な魚粉や牡蠣殻などを特別に配合したものを使用する。飼料も好きなだけ与えるのではなく、給餌制限をして、ある程度の空腹感を与え、良い卵を産ませる工夫をしている。また、給餌される飼料の量が偏らないよう、一日に5回ほど飼料を均一にする作業を行う。なお、給餌制限には、1グラム単位の微妙な調整が必要だが、以前、それを知らずに自己流で給餌制限を行い、卵の品質を落としてしまったことがあるそうである。

新しき村では、鶏を健康な状態に保つため、鶏糞の清掃を毎週行っている。鶏舎を常に清潔に保ち、アンモニアなどの発生を抑える努力をすることが、品質の良い卵の生産につながる。また、採卵を1日2回行い、常に新しい卵を出荷している。

卵を生産していて嬉しいのは、近隣や東京などからもわざわざ卵を買いに来てくれるお客さんから、黄身が盛り上がっていておいしい。新鮮なので安心して生で食べられるという声を聞いたときである。これからも鶏舎を清潔に保ち、品質の良い卵を生産していきたいと話してくれた。

写真右が河内光延さん、中央が本間健史さん、左が佐藤直人さん

毛呂山歴史散歩

文化財シリーズ 184

毛呂のお天王様

毎年、7月15日に近い土日に、「毛呂のお天王様」の名で親しまれている毛呂本郷の夏祭りが催されます。2基の山車が地区内を練り歩き山車の上では囃子にあわせてさまざまな演目が演じられます。

お天王様の「天王」とは牛頭天王のことで、「御霊」とならんで疫病をもたらす恐ろしい神とされてきました。御霊とは平安時代、怨みをもって命を落とした貴族の霊などで、天神様として有名な菅原道真が代表例です。そのような御霊や牛頭天王の怒りが疫病をもたらすという考え方が平安時代以降民間に広がり、神輿に牛頭天王や御霊を迎え入れ、経文を唱えたり美しい歌舞を披露して慰め、怒りを鎮めようとしたのです。

平安京は京都盆地のなかにあり、夏には湿度も高く家が密集した都市だったため、一度疫病が発生するとみるみる広まっていきました。京都八坂神社の祇園祭はそうした背景から生まれた御霊を祓う御霊会の最たるものです。牛頭天王の祭りは八坂神社の信仰とともに全国に広まり、疫病の発生しやすい夏に行われました。

毛呂本郷のお天王様もかつて地区内にあった八坂神社の祭りで、御霊会の意味を持っています。毛呂本郷でも古くは神輿を担ぎ、渡御を行っていました。大正8年（1919）ごろより山車も曳かれるようになり、あわせて囃子も奉納されました。戦時中、一時中断したこともありましたが、戦後復活し、昭和22年、越生町本町で神田大橋流の囃子を習い、現在まで引き継がれています。神輿は担ぎ手の不足などの理由からやがて姿を消しましたが、今も祭りの当日はお仮屋に飾られています。山車はどなたでも曳くことができますので、どうぞご参加ください。

山車が埼玉医大前を曳行
（昭和30年代ごろと推定）